２．嘉納治五郎のピエール・ド・クーベルタン宛書簡(1)
―嘉納のＩＯＣ委員就任から第一次世界大戦まで―

神戸松蔭女子学院大学　和田　浩一

キーワード：オリンピック、オリンピズム、体育

２．Letters from Kano Jigoro to Pierre de Coubertin (1)
― from Kano's inauguration as the IOC member to World War I ―

Koichi Wada　(Kobe Shoin Women's University)

Key words : Olympic, Olympism, physical education

Abstract

Recently, researchers on judo have revealed some letters from Kano Jigoro (1860-1938), the first Asian member of the International Olympic Committee (IOC) in 1909, to Pierre de Coubertin (1863-1937), founder of the Modern Olympic Games, at the Historical Archives of the IOC in Lausanne. This study traces the exchange between these two figures, analysing the above letters from Kano to Coubertin. In the IOC Archives, there are seven letters from Kano to Coubertin, which were sent from 1909, when Kano was elected to be the IOC member, to 1925, when Coubertin resigned as its president. Within them, there are four letters sent before World War I (1914), which are discussed in this paper. Three letters of four, dated 14 September 1909, 24 May 1911, and 18 August 1913, are connected with the IOC's affairs, for example, attendance at the IOC general meetings and the Olympic Congress, and vote of confidence in the election of the new IOC members. In the other one on 1st December 1912, written in Paris, Kano asked Coubertin to meet in this city; that is, this has nothing directly to do with the IOC's work. Based on these four letters, there is no evidence that Kano and Coubertin exchanged their ideas about Olympism or physical education before World War I. It can be said that Coubertin

thought that he communicated Olympism to Kano by sending every month the *Revue Olympique* which included many articles on this subject. Kano, who did not have access to international media like *Revue Olympique*, however, at least until World War I, did not explain to Coubertin the Japanese and Asian ideas about physical education and his views on Olympism.

Ⅰ．問題の所在

本研究は、国際オリンピック委員会（International Olympic Committee、以下「ＩＯＣ」と記す）の史料室が所蔵する、嘉納治五郎（1860-1938）のピエール・ド・クーベルタン（Pierre de Coubertin, 1863-1937）宛書簡を分析し、両者の書簡による交流過程をオリンピック史的立場から明らかにする。

両者の書簡の存在については長らく、当事者である嘉納[1]とクーベルタン[2]、および嘉納の二男の嘉納履正[3]による証言がすべてであった。ところが近年、ＩＯＣ史料室での調査が進み、そこで発見された嘉納のクーベルタン宛書簡を用いた研究が見受けられるようになってきた。1909年９月14日付書簡をクーベルタンとの交流の原点に位置づけ、嘉納の思想の深まりを説明しようとする村田（2000年）[4]、Brousse（2000年）[5]、Niehaus（2003年）[6]、1921年８月１日付および同年11月17日付書簡をもとに、極東競技会を国際政治の舞台として位置づけその歴史的な意味を描くAbe（2003年）[7]は、その代表例である。しかし、両者の書簡の全体像は、これまで明らかにされてはこなかった。

ここ数年、日本体育学会のシンポジウム「嘉納治五郎と日本の体育・スポーツ」[8]に代表されるような、新しい視点と新しい史料による新しい嘉納治五郎の解釈が進みつつある。最近の研究で注目すべき点は、嘉納の思想をクーベルタンの思想（オリンピックの思想あるいはオリンピズム）との関係で論じることにより、日本的・アジア的なスポーツ思想が秘める可能性を、欧米にルーツをもつ20世紀型スポーツ文化に投影させようとする問題意識である。両者の思想的近似性を柔道思想の中に位置づけるBrousse（2000年）[9]、Franchini（2001年）[10]、永木（2006年）[11]、日本の体育・スポーツの発展過程に位置づけるNiehaus（2003年）[12]、同じくオリンピック史に位置づけるWada（2005年）[13]がその例である。

本研究の特徴は、不特定多数の人々を読者に想定した印刷されたテクストではなく、特定の個人を読み手に想定して直筆で書かれた書簡を分析対象とすることによって、嘉納とクーベルタンの思想的な交流過程に迫ろうとするところにある。外国との通信手段が手紙に限られていた当時、ＩＯＣ会長（クーベルタン）と、オリンピックから地理的にも文化的にも離れていた日本の委員（嘉納）との間に、書簡による思想的な交流があったという仮説に基づき、次の３つの課題を設定する。すなわち、１）嘉納のクーベルタン宛書簡の全体像を示すこと、２）各書簡をオリンピック史上に位置づけること、３）書簡を通し二人の間でいかなる思想的な交流が進められたのかを明らかにすること、である。ただし、課題２）と３）で取り上げる書簡は、嘉納のＩＯＣ委員就任（1909年）後から第一次世界大戦（1914年）までに交わされたものに限定する。

なお、本研究ではオリンピズムという用語を、クーベルタン独自のスポーツ教育学の意味で用いている[14]。

II. 嘉納のクーベルタン宛書簡の全体像

ＩＯＣ史料室はオリンピック博物館（スイス・ローザンヌ）の地下１階にあり、ＩＯＣの情報管理部（Département Gestion de l'Information）が管理・運営している[15]。嘉納関連の書簡が集められた「嘉納治五郎書簡ファイル」（KANO, Jigoro : Correspondance 1909-1935）他、クーベルタンが残した当時

のオリンピック関係史料が数多く保存されている。

「嘉納治五郎書簡ファイル」には、１）嘉納のクーベルタン宛書簡５通、２）嘉納のブロネイ[16]宛書簡５通、３）ジェラール[17]のクーベルタン宛書簡２通、４）小村寿太郎（1855-1911）のジェラール宛書簡のコピー１通（ジェラールがタイプして内容を別の紙に写したもの）などが収められている。また、「極東競技会関連ファイル」にも、嘉納のクーベルタン宛書簡２通が保存されている。

嘉納のクーベルタン宛書簡計７通の概要は、表１の通りである。所蔵されている書簡はすべて、クーベルタンがＩＯＣ会長を辞職する1925年までに送られたものであり、「同男［クーベルタン］[18]が、会長を辞されて後は面会の機会はなく時々書面の遣り取りする位であった」[19]という嘉納の証言を裏づけるものではない。

クーベルタンの嘉納宛書簡は、当然のことながら、ＩＯＣ史料室には保管されていない。次節以降、現在、日本で所在が確認できていないこれらの書簡についても、嘉納がクーベルタンに宛てた手紙をもとに、その内容をできるだけ明らかにしていくことにする。

表１．ＩＯＣ史料室が所蔵する嘉納のクーベルタン宛書簡
Table 1. Letters from Kano to Coubertin conserved in the IOC Archives.

No.	日　付	発信地	言語	語数	形式	便箋・用紙	
						大きさ（cm）	枚数
1	1909. 9.14	東京	英語	221	手書き	29 × 23	1
2	1911. 5.24	東京	英語	109	手書き	25 × 19	1
3	1912.12. 1	パリ	仏語	84	手書き	21 × 13	1
4	1913. 8.18	東京	英語	127	手書き	21 × 27 の二つ折り	2
5	1921. 8. 1	東京	英語	2,699	タイプ	28 × 22	6
6	1921.11.17	神戸	英語	415	手書き	26 × 19	2
7	1924. 2. 3	東京	英語	824	タイプ	28 × 22	3

注１．便箋の大きさの単位は cm とし、小数点以下は四捨五入した。
注２．書簡の所蔵ファイルは次の通り。
　　１～４、７：嘉納治五郎書簡ファイル、５、６：極東競技会ファイル
注３．３の書簡については、嘉納書簡ファイルに所蔵されているのはコピーのみである。

III. 各書簡のオリンピック史意味

１．1909年９月14日付書簡

［原文］

Tokyo, Japan, Sept. 14th 1909

Baron de Coubertin,

Dear Sir,

Your letter of June 15th has been duely [sic.] received. I had already been informed by the French Ambassador Mons. Gérard that the Comité International Olympique had requested H. E. [Ambassador] to nominate a gentleman of Japan interested in the work and object of the above society, as a member for Japan, and it is with genuine pleasure that I received your communication of my having been

unanimously elected a member at the meeting of your committee held in Berlin May last.

As to the possibility of my been [being ?] present at the next meeting to be held next year in Budapest, I cannot say anything definitely about it at present, but I will try to attend the meeting of the Vth Olympiad in 1912 at Stockholm, if circumstances allow me to do so.

The "Revue Olympique" as well as your recently published book "Une Campagne de vingt-et-un ans" I have duely [sic.] received for which publications please to accept [please accept ?] my most cordial thanks.

I have also forwarded my annual subscription (25 francs) to the Treasurer, Baron Godfroy de Blonay.

Thanking you once more for your cordial letter, I remain, my dear sir and colleague, yours sincerely,

J. Kano

嘉納がクーベルタンに宛てた一通目の手紙は、左隅に「Higher Normal School」（高等師範学校）の文字が入ったほぼＡ４サイズの便箋に、青い万年筆で書かれたものであった。

冒頭の記述によれば、クーベルタンは嘉納に1909年６月15日付の手紙を送っていることになる。その手紙の目的は、1909年５月28日から６月２日にかけて開かれたＩＯＣ総会（ベルリン）で嘉納がＩＯＣ委員に選ばれたこと[20]を、本人に伝えることであった。

第二段落からうかがえるのは、クーベルタンが６月15日付の書簡の中で、ブダペストで翌年（1910年）に開催が予定されていたＩＯＣ総会への出席を嘉納にうながすとともに、1912年のストックホルム大会への日本の参加を打診していたことである。ヨーロッパの文明史観から生まれたオリンピック思想とアジアの体育思想が結びつく、オリンピック史上大きな節目となる可能性を秘めた問いかけではあったが、嘉納はこのとき曖昧な返事しかしていない。彼は近代オリンピックの運営方法について何も知る由がなく、加えて、ヨーロッパ渡航が経済的・時間的に大きな負担だったという時代的な限界を考えれば、当然の回答だったと言えるだろう。

注目すべきは、『ルヴュー・オランピック（*Revue Olympique*）』と出版されたばかりのクーベルタンの著書『21年間のキャンペーン』[21]を、嘉納が受け取ったと述べている点である[22]。『ルヴュー・オランピック』は、その大半がクーベルタンの筆による記事で占められた、ＩＯＣ公認の定期刊行物であった。様々な視点からのオリンピズムの考察に加え、ＩＯＣの運営状況が報告されたこの月刊誌は、いわば彼のスポークスマン的メディアだったと言える。一方の『21年間のキャンペーン』は、クーベルタンが1887年から本格的に開始したスポーツによる教育改革運動（オリンピック運動）の中間報告書であり、オリンピック大会や各種会議などの経緯をオリンピック復興者としての立場からふり返る内容となっている。嘉納の返信内容を読む限り、ベルリン総会後にクーベルタンが嘉納に送った書簡中に、オリンピズムについて解説する具体的な記述があったとは考えにくい。ただ、前述の著書・雑誌の送付と受領とによって、両者の間にはこのときから、体育やスポーツ教育に関する思想の交流が始まったと言うことはできよう。

なお、嘉納は最終段落で、ＩＯＣの年会費（25フラン）を会計担当のブロネイにすでに送ったと記している。おそらくクーベルタンの６月15日付書簡の中に、年会費の説明があったのだろう。興味深いのは、嘉納はブロネイに送った1909年10月10日付の手紙（ＩＯＣ史料室所蔵）の中で、「１週間前に国際郵便為替で合計25フラン」を送ったと書いていることである。つまり、クーベルタンには９月14日よりも前に払ったと述べ、ブロネイには10月３日ごろに払ったと伝えており、これらの内容は辻褄が合っていないことになる。

２．1911年５月24日付書簡

［原文］

May 24th 1911

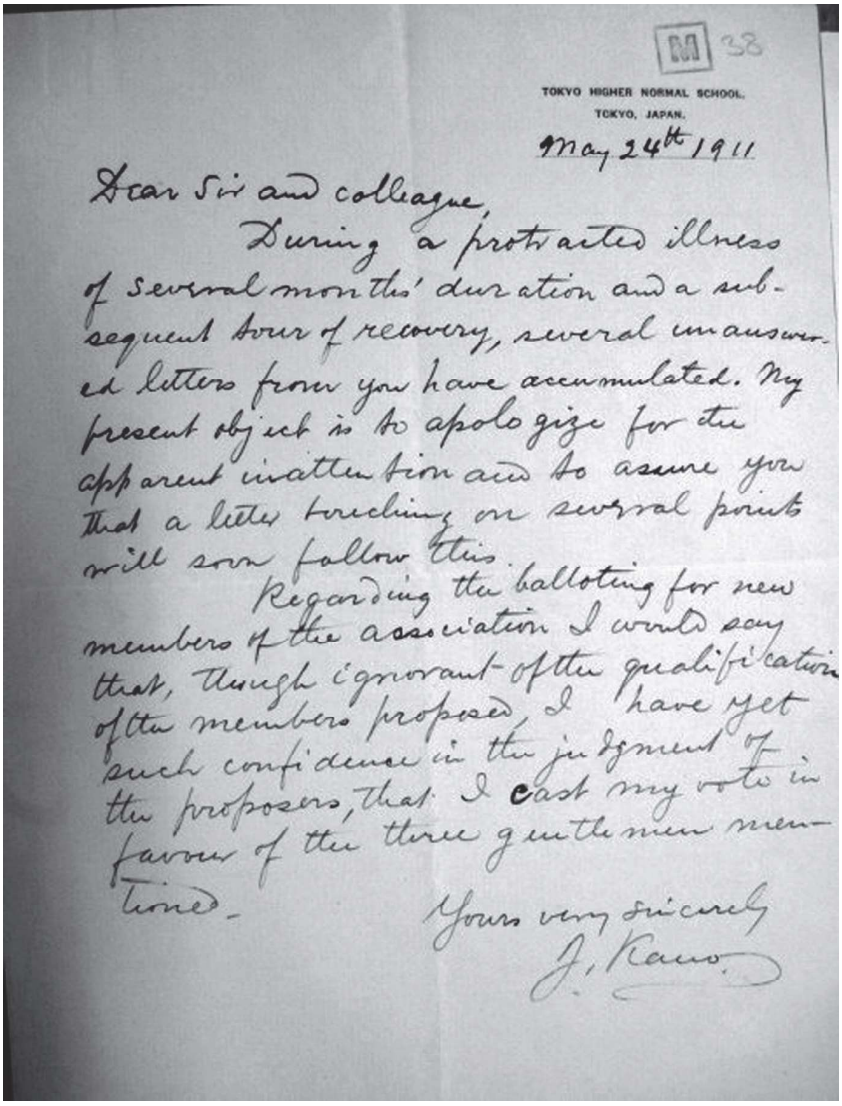
Dear Sir and colleague,

During a protracted illness of several months' duration and a subsequent tour of recovery, several unanswered letters from you have accumulated.　My present object is to apologize for the apparent inattention and to assure you that a letter touching on several points will soon follow this.

Regarding the balloting for new members of the association I would say that, though ignorant of the qualifications of the members proposed, I have yet such confidence in the judgment of the proposers, that I cast my vote in favour of the three gentlemen mentioned.

Yours very sincerely

J. Kano



TOKYO HIGHER NORMAL SCHOOL,
TOKYO, JAPAN.

May 24th 1911

Dear Sir and colleague,

During a protracted illness of several months' duration and a subsequent tour of recovery, several unanswered letters from you have accumulated. My present object is to apologize for the apparent inattention and to assure you that a letter touching on several points will soon follow this.

Regarding the balloting for new members of the association I would say that, though ignorant of the qualifications of the members proposed, I have yet such confidence in the judgment of the proposers, that I cast my vote in favour of the three gentlemen mentioned.

Yours very sincerely
J. Kano

写真１．嘉納のクーベルタン宛書簡（1911 年５月 24 日付、ＩＯＣ史料室所蔵）
Photograph 1. Letter from Kano to Coubertin. (24 May 1911, IOC Archives.)

２通目の手紙には、右隅に「TOKYO HIGHER NORMAL SCHOOL. TOKYO, JAPAN.」の文字が印刷された便箋が使われている。

この手紙の冒頭で、嘉納は自分の病気が数ヶ月にわたって長引き、クーベルタンからの複数の手紙に返信できなかったことを詫びている。この病気とは、おそらく糖尿病のことであろう。糖尿病を患って学校を休んでいた嘉納が同年11月18、19日に行われたオリンピックの予選会に顔を出したという金栗四三の回想や[23]、東京高等師範学校在職中に「病気したことのない父も、糖尿病では長く床についた」という長女綿貫範子の証言[24]が、その根拠である。嘉納は同年７月に大日本体育協会を設立し、その初代会長の職に就くことになるが、そのときは療養中あるいは病み上がりだったことになる。

二段落目では、３名の候補者を新しいＩＯＣ委員として承認する旨をクーベルタンに伝えている。当時、新しい委員の選出は、総会などでのＩＯＣ委員の投票による承認の他に[25]、書面による投票も認められていた[26]。

実は、嘉納がこの手紙を書いていた頃、ブダペストではＩＯＣ総会（1911年５月23～27日）が開かれ、そこで行われた選挙で２名の新ＩＯＣ委員が誕生した。しかし、これは候補者が２名の選挙であり、嘉納が記している候補者３名の選挙ではない。1911年５月のブダペスト総会から1912年７月のストックホルム総会まで、『ルヴュー・オランピック』で新ＩＯＣ委員選出のニュースは報じられておらず、しかも、ストックホルム総会で選ばれた新ＩＯＣ委員は１名だけであった[27]。したがって、この書簡で嘉納が投票しているのは、1911年５月の総会で選ばれた２名ではなく、『ルヴュー・オランピック』1911年３月号で新ＩＯＣ委員として発表されたAbel Ballif（フランス）、Evert J. Wendell（アメリカ）、そしてOscar N. Garcia（チリ）の３名[28]だったと考えるのが妥当である。クーベルタンがＩＯＣ委員たちに宛てた1911年１月28日付書簡[29]は、まさしくこの３名の候補者への信任投票を「できるだけ早く」送るように指示するものとなっている。つまり、『ルヴュー・オランピック』３月号の発行時期から逆算すれば、嘉納は、1911年３月中旬ごろまでに終えることを期待されていた信任投票を、病気が理由だったとはいえ、それから２ヶ月過ぎた５月におこなっていたことになる。

最後に、返信できていないクーベルタンからの手紙がたまっていた点について確認しておきたい。両者が1909年６月と９月に書簡をやりとりしてから1911年５月24日までの、１年以上にわたる期間中、ＩＯＣ会長のクーベルタンが各国の委員に、ＩＯＣの運営に関する複数の書簡を送っていたことは想像に難くない。例えば、1910年（リュクセンブール）[30]と1911年（ブダペスト）のＩＯＣ総会への案内状[31]などである。前述した、３名の新ＩＯＣ委員候補者への信任投票を依頼する1911年１月28日付書簡も、そのうちの一通であった。

３．1912年12月１日付書簡

［原文］

Paris, le 1, Déc. 1912

M. le Baron P. de Coubertin,

Désirant pouvoir vous voir pendant mon séjour à Paris, je vous prie de vouloir bien m'indiquer l'heure où je pourrai avoir l'honneur de me pénétrer chez vous.　Je suis libre jusqu'à vendredi prochain.

J'ose espérer, M. le Baron, que vous voudrez bien me pardonner cette importunité et agréer, avec mes excuses, l'hommage de mes sentiments respectueux.

Jigoro Kano

Directeur de l'Ecole Normale Supérieure de Tokio

3 rue de Châteaubriand

［試訳］

Ｐ・ド・クーベルタン男爵

パリ滞在中にお目にかかりたく存じます。ご自宅におじゃまできる時刻をお知らせ願えませんでしょうか。私は次の金曜日まで時間があります。

男爵、厚かましいことは重々承知しておりますが、なにとぞこの願いをお聞き届けくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。敬具

嘉納治五郎

東京高等師範学校校長

シャトーブリアン通り３番地

これは、Ａ４より若干小さめの便箋を横にして半分に折り、そのＡ４横右半分のスペースにフランス語で書かれた書簡である。文字の書かれたスペースの左上には、「Ambassade Impériale du Japon」（大日本帝国大使館）の文字が印刷されている[32]。おそらく、嘉納がストックホルム大会後の欧州視察でパリに入った際、日本大使館に立ち寄り、大使館の便箋を借りて書いたものだろう。ＩＯＣ史料室に保管されているクーベルタンに宛てた書簡のうち、嘉納がフランス語で書いているものはこれだけである。

加藤によれば、嘉納はストックホルム大会の期間中（1912年７月）、「８月下旬パリーで彼［クーベルタン］を訪問すると約束した」[33]ことになっている。「８月下旬」という時期に疑念の余地は残るが、嘉納はクーベルタンとの約束を果たそうとしていたことが理解できる。

手紙の日付にある1912年12月１日は日曜日なので、その週の金曜日までの約１週間は、嘉納にとって比較的自由なスケジュールになっていたと考えられる[34]。実際にクーベルタンと会えたのは３日後で、12月４日（水）の夕刻だった。加藤によれば、嘉納の英文日記には「12月４日（水）午後５時に大使館へ帰り、クーベルタン男爵を待つ。彼が来た。彼の案内で……（ママ）へ行く。拳斗、フェンシングなどを見る。７時半頃帰る」[35]と記されていたという。ボクシングとフェンシングを称賛していたクーベルタン[36]は、『ルヴュー・オランピック』1906年１月号で、「柔術はスポーツではない」という立場を表明していた[37]。クーベルタンに、ボクシングとフェンシングのスポーツ的な特徴を、柔道の創始者である嘉納に説明しようとした意図があったのか、あるいは嘉納が柔道の奥行きを広げるために、これらのヨーロッパ的な対人型スポーツの見学を希望したのか、興味がもたれるところである。いずれにせよ、嘉納とクーベルタンに二人の時間（約２時間）を与え、ボクシング、フェンシング、それにおそらくは柔道の教育的な価値について議論を交わすきっかけを作ったのがこの書簡だったことを、忘れるべきではない。

４．1913年８月18日付書簡

［原文］

Tokyo Higher Normal School

Aug. 18th 1913

Dear Baron de Coubertin,

I am now in Japan back from my long journey round the world.　I am sorry that I could not attend Lausanne meeting but am glad to hear that it was great success.

I am looking forward to the Paris meeting next year with great interest.　I hope to be present myself and am trying to select competent delegates which when decided will be reputed to you at me.

As to the voting for new members, please understand that I wish to vote the same as you do because I do not know those persons× myself and believe that you have competent judgment onto the subject.

I remain

Yours sincerely,

Jigoro Kano

× G. Duperron

ここでまず確認しておくべきことは、ストックホルム大会を含むヨーロッパ視察旅行から嘉納が帰国したのが、1913年３月６日だったことである[38]。したがって、この手紙は帰国してから約５ヶ月後に書かれたことになる。

この書簡の一つ目のポイントは、嘉納がまたもや、すでに選挙が終わっていたＩＯＣ委員候補者への信任投票をおこなっていることである。『ルヴュー・オランピック』1913年８月号は、ＩＯＣが３名の新委員選挙を行いDimitri Stancioff（ブルガリア）、Raoul do Rio Branco（ブラジル）、Georges Duperron（ロシア）の３名をそろって選出したことを報じている[39]。Duperronに関して言えば、ＩＯＣは1913年５月の総会（ローザンヌ）において、彼の選挙を後日行うことを決めていた[40]。嘉納はDupperonの名前しか挙げていないが、「これらの人々（those persons）のことを知らないので」とその候補者が複数いることを承知しておいて、その上でクーベルタンと「同じように投票したい」と伝えている。郵便投票の締切が『ルヴュー・オランピック』８月号の発行直前だったと仮定し、当時の印刷事情等を勘案すると、クーベルタンはＩＯＣ委員たちに、７月下旬から８月中旬のいずれかの日に期限を定めた信任投票を依頼する書簡を、1913年５月の総会後からせいぜい７月中旬までの間に送っていたことになる。

二つ目のポイントは、帰国日との兼ね合いから、1913年５月に開かれたローザンヌ会議（Lausanne meeting）に嘉納が出席しなかった点である。ローザンヌ会議は、実はＩＯＣ総会とオリンピック・コングレスの２本建てとなっていた。「この会議が大成功を収めたと聞いてうれしく思う」とあるのは、総会のことではなくオリンピック・コングレスのことである。嘉納はおそらく、『ルヴュー・オランピック』1913年７月号に掲載されたコングレスの報告記事[41]を読んだ後に、この手紙を書いたのであろう。クーベルタンはコングレスを、「新しいオリンピズム、すなわち『身体的、知的、道徳的そして審美的なすべての教育学』を作り出す」場であると定義し、オリンピック運動におけるオリンピック・コングレスの役割に大きな期待をかけていた[42]。しかし、残念ながら嘉納は、アジア人として初めてオリンピズムの本質に触れられる機会を逸していたのである。

三つ目は、ＩＯＣ委員に翌年のパリ会議を案内した、会長名による1913年２月１日付書簡[43]に対して、嘉納が興味を示す言葉を残していることである。実はパリ会議も、ＩＯＣ総会（1914年６月13、14日）とオリンピック・コングレス（６月15～23日）の二本立てになっていた。「大いに関心をもちながら、次回の会議（meeting）を楽しみに待っている」という嘉納のコメントは、ローザンヌ会議と同様、総会ではなくコングレスに向けられたものだった。これは、オリンピズムのアジアへの展開の足がかりが得られそうだという意味において、クーベルタンにとって意義ある言葉だったと言える。しかし、嘉納は結局ローザンヌに引き続き、パリ・コングレスにも出席しなかった。

Ⅳ．書簡を通した嘉納とクーベルタンの思想的な交流過程

前節では、嘉納が第一次世界大戦前までにクーベルタンに宛てた書簡４通を分析した。その主な内容は以下の通りにまとめられる。

１．1909年９月14日付書簡
　１）ＩＯＣ委員就任の喜び
　２）ＩＯＣ総会（1910年、ブダペスト）への出席の見通し
　３）オリンピック大会（1912年、ストックホルム）への参加の見通し
　４）『ルヴュー・オランピック』と『21年間のキャンペーン』（1909年刊行）の受領
　５）年会費の送付
２．1911年５月24日付書簡
　１）病気で返信できなかったことへの謝罪
　２）新ＩＯＣ委員選出の信任投票
３．1912年12月１日付書簡
　１）クーベルタンへの面会依頼（パリ）
４．1913年８月18日付書簡
　１）ＩＯＣ総会とオリンピック・コングレス（1913年、ローザンヌ）に出席できなかったことへの謝罪
　２）次回ＩＯＣ総会とオリンピック・コングレス（1914年、パリ）への出席の見通し
　３）新ＩＯＣ委員選出の信任投票

１通目はクーベルタンが嘉納個人に宛てた書簡への返信だが、残りの３通は会長としての彼がＩＯＣ委員全員に宛てた、いわば業務連絡のための書簡に対する返信であった。また、いずれの書簡の内容にも、嘉納がクーベルタンに、オリンピズムや日本の体育思想などについて意見を述べたりした形跡は見られない。つまり、第一次世界大戦までの両者の間には、書簡を通してのオリンピック、体育、教育などに関する思想的な交流は行われていなかったことになる。

クーベルタンは『21年間のキャンペーン』や『ルヴュー・オランピック』といった図書・雑誌をこまめに発行し、オリンピズムについての自分の考えを絶えず発信していた。したがって、たとえ『ルヴュー・オランピック』がＩＯＣ委員全員を読者に想定する印刷されたテクストだったとしても、これらを毎月送付することによって嘉納個人へのオリンピズムのアピールはなされていると、クーベルタンが考えていた可能性は十分にある[44)]。逆に、このような他国の体育・スポーツ関係者が読めるようなメディアをもたなかった嘉納は、個人的な書簡を通す以外に、日本的あるいはアジア的な体育思想を説明する術はなかった。そして、少なくとも第一次世界大戦前までは、クーベルタンに対し書簡を通して自分の考えを表明したり、オリンピズムへの意見を述べたりすることはなかった。

Ⅴ．結論

ＩＯＣ史料室に所蔵されている嘉納のクーベルタン宛書簡をオリンピック史的観点から分析した結果、両者の書簡による交流過程は以下の通りに明らかとなった。

１．ＩＯＣ史料室には嘉納のクーベルタン宛書簡が計７通存在する。これらはいずれも、嘉納がＩＯＣ委員となった1909年からクーベルタンがＩＯＣ会長を辞職する1925年までに送られたものだった。これらの限定された史料に基づけば、嘉納はＩＯＣを辞してからのクーベルタンとは、手紙による連絡をとっていなかったことになる。

２．第一次世界大戦までに嘉納がクーベルタンに送った書簡のうち、1912年12月１日付書簡はパリ

での面会を申し込むものであり、ＩＯＣの公式の職務とは直接関係のない内容であった。残りの３通は、ＩＯＣ総会・オリンピックコングレスへの出席や新ＩＯＣ委員選出のための信任投票など、ＩＯＣ委員としての職務に関係する内容であった。

３．本稿で分析した４通の書簡の中には、両者がオリンピズム、体育、スポーツ教育などについて思想的な交流を進めている事実はなかった。ただし、様々な視点からオリンピズムを考察する論説が数多く掲載されていた『ルヴュー・オランピック』は、嘉納を含むＩＯＣ委員に毎月送られており、クーベルタンはこの月刊誌の送付によって、嘉納にオリンピズムをアピールできていたと考えていた可能性はある。これに対し、嘉納からクーベルタンへの日本的あるいはアジア的な体育思想の説明やオリンピズムへの意見表明は、第一次世界大戦まではなかった。

今後は、本稿で扱わなかった残り３通の書簡を分析し、第一次世界大戦後からクーベルタンがＩＯＣ会長を辞任する1925年までの、両者の思想的交流過程を明らかにしたい。

Ⅵ. 注

１）「……間もなく投票の結果正式に委員を決定したから会の為参加して呉れとクーベルタン男から書面が来た。……爾来何回かは書面の往復はしたが面会したのは……又筆まめの人であって絶えず書面を寄越し……」嘉納治五郎（1937）「クーベルタン男を懐ふ」『オリンピック』第15巻第10号、p. 5.

２）「［嘉納治五郎ら新ＩＯＣ委員11名］全員との間には、真の友情が織り込まれた。……、私［クーベルタン］はこれらの委員たちと定期的に手紙で連絡し合った」Coubertin, Pierre de (1931). *Mémoires olympiques*, Paris : Revue EP.S, 1996, p. 109.

３）「クーベルタン男爵の亡父宛の手紙などたしかにあったが今は散佚してしまい……」嘉納履正「オリンピックに対する先人の苦心」東竜太郎（1962）『オリンピック』わせだ書房、p. 200.

４）村田直樹（2000）「嘉納治五郎師範に学ぶ：東京五輪招致に捧げた後半生」『武道』2000年12月、p. 55.

５）Brousse, Michel (2000). *Les origines du judo en France de la fin du XIXe siècle aux années 1950 : Histoire d'une culture sportive*, Thèse pour obtenir le grade de Docteur de l'Université de Bordeaux 2, Mention : Sciences et Techniques des Activités Physiques et Sportives, pp. 39-40.

６）Niehaus, Andreas (2003). *Leben und Werk KANÔ Jigorôs (1860-1938) : Ein Forschungsbeitrag zur Leibeserziehung und zum Sport in Japan*, Germany : Ergon Verlag, pp. 130-135.

７）Abe, Ikuo (2003). Historical Significance of the Far Eastern Championship Games : An International Political Arena. *Bulletin of Institut of Health and Sport Sciences*, University of Tsukuba, no. 26, pp. 37-68.

８）司会：寒川恒夫、演者：鈴木康史、和田浩一、真田久、永木耕介「嘉納治五郎と日本の体育・スポーツ」日本体育学会（神戸大学）、2007年９月６日

９）Brousse (2000), p. 70, 156, 197.

10）Franchini, Emerson (2001). Judo's foundations applied to olympic education and to the development of fair play. *International Olympic Academy Year Book*, pp. 190-199.

11）永木耕介（2006）『嘉納柔道思想の継承と変容――国際化に伴う「教育的価値」と「競技化促進」の相克――』平成18年度博士論文（筑波大学）、pp. 119-124.

12）Niehaus (2003). pp. 67-70, 130-143, 172-174, 266-267.

13）Wada, Koichi (2005). *L'origine du mouvement olympique au Japon : développement de l'olympisme en Asie par Pierre de Coubertin*. Mémoire de DEA du STAPS à l'Université de Strasbourg, pp. 31-37, 47-49.

14）ストックホルム大会（1912年）の折、クーベルタンは嘉納に「オリンピックは教育の理想を示すものだ」と説明している。嘉納治五郎（1938）「わがオリンピック秘録」『改造』第20巻第７号、小谷澄之ほか編（1988）『教育、国民体育：国際オリンピック大会』嘉納治五郎大系８、本の友社、p. 378.

15）ＩＯＣ史料室については、以下のＵＲＬを参照のこと。http://www.olympic.org/fr/passion/studies/archives/index_fr.asp

16）Godefroy de Blonay（1869-1937）はスイスのＩＯＣ委員で、当時、ＩＯＣの会計を担当していた。

17）Auguste Gérard（1852-1922）はオリンピズムを理解していたフランスの外交官で、駐日大使在任中に、嘉納を日本初のＩＯＣ委員としてクーベルタンに推薦した。Wada (2005), pp. 31-47.

18）本文および原文中の[　] は、著者の挿入である。

19）嘉納（1937）、p. 5.

20）*Revue Olympique*, juin 1909, p. 89. なお、嘉納のＩＯＣ委員への就任に関する詳細な経緯については、次の文献を参照のこと。Wada (2005), pp. 31-37.

21）Coubertin, Pierre de (1909). *Une campagne de vingt-et-un ans (1887-1908)*, Paris : Education Physique, 220p.

22）残念ながら、『21年間のキャンペーン』と1909年以前に発行された『ルヴュー・オランピック』は、現在のところ講道館図書資料部をはじめ、日本の大学図書館での所蔵は確認できていない。ちなみに、講道館が所蔵する最も古い『ルヴュー・オランピック』は、1910年11月号である。

23）金栗四三（談）（1938）「恩師嘉納先生」『柔道』第９巻第６号、p. 46.

24）加藤仁平（1964）『嘉納治五郎――世界体育史上に輝く――』逍遥書院、p. 221.

25）前述の通り、嘉納はＩＯＣ総会で委員に選ばれた。なお、ＩＯＣ委員の投票による選出は、形の上では民主主義的な手続きを踏んでいるように見えるが、候補者を実際に選んでいたのは常にクーベルタンだった。Wada, 2005, pp. 50-53.

26）例えば、クーベルタンはＩＯＣ委員に宛てた1908年12月15日付の書簡で、３名の新委員候補者（ルーマニア、アメリカ、トルコ）への信任投票を「遅滞なく」郵送するように指示している。Circulaire de Coubertin, 15 décembre 1908, Correspondance, écrits circulaires : Pierre de Coubertin 1895-1937（ＩＯＣ史料室が編集した、クーベルタンのＩＯＣ委員宛通知状のコピー集）, p. 32.

27）この総会には嘉納も出席しており、投票に参加したはずである。*Revue Olympique*, août 1912, pp. 123-124.

28）*Revue Olympique*, mars 1911, p. 47.

29）Circulaire de Coubertin, 28 janvier 1911. Correspondance, écrits circulaires : Pierre de Coubertin 1895-1937（前出）, p. 37.

30）嘉納が1909年９月14日付の書簡で記していた「翌年［1910年］にブダペストで開かれる次回の［ＩＯＣ］総会」は、１ヶ月後に迫った1910年４月に突如リュクセンブール（６月11～13日）に変更された。ハンガリーの政情不安がその理由だった。*Revue Olympique*, avril 1910, p. 51.

31）Circulaire de Coubertin, 5 novembre 1910. Correspondance, écrits circulaires : Pierre de Coubertin 1895-1937（前出）, p. 36.
32）大日本帝国大使館の住所を示す最終行だけは、Ａ４横左側半分の上方に書かれている。
33）加藤（1964）、p. 170.
34）嘉納は同年12月14日にはまだパリにいた。「12月14日（土）（午前午後高等学校見学）それからラルース書店へ行く。沢山の本を買い、ロンドンの日本大使館へ送るように命じた。それからクーベルタン男爵を訪問。しかし彼は留守だったので名詞を置いて来た」加藤（1964）、p. 174.
35）加藤（1964）、p. 172.
36）例えば、クーベルタンのボクシング論については、以下の文献を参照のこと。和田浩一（2001）「ピエール・ド・クーベルタンのボクシング論」『体育・スポーツ史研究への問いかけ』清水重勇先生退官記念論集刊行会、pp. 79-85.
37）Coubertin, Pierre de (1906). A propos du Jiu-Jitsu. *Revue Olympique*, janvier 1906, pp. 5-7.
38）加藤（1964）、p. 271.
39）*Revue Olympique*, août 1913, p. 132.
40）*Revue Olympique*, juin 1913, p. 99.
41）*Revue Olympique*, juillet 1913, pp. 103-112. 残念ながらこの号の所在も、講道館や大学図書館などで確認できていない。
42）Coubertin, Pierre de (1913). Les Congrès olympiques. *Revue Olympique*, février 1913, pp. 19-20. なお、オリンピック・コングレスはローザンヌ（1913）までに４回開かれていた。すなわち、パリ（1894）、ル・アーブル（1897）、ブリュッセル（1905）、パリ（1906）である。
43）Comité International Olympique (Ed.) (1994). *Un siècle du Comité International Olympique : l'idée, les présidents, l'oeuvres*, vol. I, Lausanne : CIO, p. 109, 197.
44）講道館図書資料部には、計16冊の『ルヴュー・オランピック』が所蔵されている（2003年２月10日の調査）。No.59 (1910.11), No.69 (1911.9), No.70 (1911.10), No.72 (1911.12), No.77 (1912.5), No.78 (1912.6), No.80 (1912.8), No.81 (1912.9), No.83 (1912.11), No.84 (1912.12), No.86 (1913.2), No.89 (1913.5), No.95 (1913.11), No.99 (1914.3), No.101 (1914.5), No.103 (1914.7).

（謝辞）
史料の調査・収集に際しては、Yoo-Mi Steffen氏（ＩＯＣ図書館元館長）、村田直樹氏（講道館図書資料部長）、およびAndreas Niehaus氏（ゲント大学准教授）の協力を仰いだ。ここに記して心からの感謝の意を表したい。
なお、本研究は、平成20－22年度科学研究費補助金基盤研究（Ｂ）「嘉納治五郎の体育思想の海外における評価と受容」（課題番号：19500553）の助成を受けたものである。